

佳作 観察記録

蚯蚓の干物



参考資料1 観察記録

・分析と考察

1. 性格

その男は生真面目だが、少し神経質の過ぎるところがあった。常日頃から他人に悪い印象を持たれないよう心がけた結果、あまりにも卑屈で根暗な一人の人間が出来上がってしまったのだ。彼はその寡黙な性格と大柄な体型から、威圧的な態度をとっているとよく相手に勘違いされることが多い。だがその心臓の大きさは、蚤と比べてもどっこいどっこいのいいところ勝負だろう。何でも無いような日常生活におけるちよつとしたことに深く絶望し、悔み、後々まで引きずる。彼はそんな、小さな男だった。

例えばある日、彼は電車で老人に席を譲ったが、それを断られてしまったことがあった。別に相手にとって他意はなかったのだろう。ただ健康のために電車で立っていたかっただけなのかもしれないし、自分は席を譲られるほど老いていないというアピールをしたかっただけなのかもしれない。だが断られた瞬間に彼

の表情は一瞬にしてさつと青ざめた。彼の性格からすると——自分は親切心だと思っていたことは、結果としてただ相手に自分のエゴを押し付けるだけとなってしまった。相手が老人だからという憐れみは、彼に対する侮蔑以外の何物でもない。なんと自分は烏滸がましい人間なのだろうか。嗚呼、もう私にはこの老人と顔を合わせる資格すら持ち合わせていない——とでも大方考えたのだろう。彼は戸惑う老人を脇目に無言で席を立ち、次の駅で車両から降り、わざわざその次に来る電車を待った。それ以来彼は電車の席が空いても、よほど長距離でない限りは座席に座らないよう心がけている。

他にもある日、彼がコンビニでアイスを買った時に、店員の失敗で時間を取られたことがあった。接客をしていた女性店員がレジ打ちを間違えたのだ。まだ辿々しい手つきから見ると、恐らくバイトを始めてからまだ日が浅いのだろう。一段落してから彼女は、思わずこちらが申し訳なくなるほど「大変申し訳御座いませんでした」を繰り返して謝罪し始めた。ここでも言わないのも無愛想だなと考えた彼は、「いえいえ、これからも頑張ってくださいね」などと気さくに一言添えてから店を出て行った。だが店を出てからすぐに彼は、ハッとしてその全身

を強く硬直させた。彼の性格からすると——ちよつと待てよ。『頑張ってください』などという適当な言葉では、『今お前はまだ頑張っていないのだからもっと精進しろ』とも解釈できてしまうのではないか。自分はバイトをしたことも無いというのに、新入りさんになんて高慢な物言いをしてしまったのだろうか。嗚呼、穴があつたら今すぐ埋まりたい——などと考えたのではないだろうか。彼の身体はしばらくの間、己自身の震えを止めることができていなかった。

他にも彼は横断歩道がない場所で道路を横切つたり、エレベータの開けるボタンと閉めるボタンを間違えてうっかり人を挟んでしまつたり、ピザを切る時綺麗に六等分できなくて不平等が生じてしまつたり云々、そういったそういう細かいことに彼はいちいち身悶え、葛藤し、悶絶するのであつた。

2. 生活

彼は規則正しい生活を送ることが、何よりも至極の楽しみであるとしていた。サラリーマンという職種が、彼にとつての天職だつたことはもはや言うまでもないだろう。まず平日は朝6時きつかりに起床。ハムエッグをパンに乗せ、コーヒをドリツプし、7時までには朝食を終える。身支度を整え7時半に家を出てから、満員電車で揺られ会社へと足を運ぶ。8時にはもうデスクに着いて仕事を始めており、12時きつかりに社員食堂で今日の日替わり定食を食べ、17時には退社の準備を始める。帰りは駅前のスーパーに寄り、夕飯と朝食の買い出しをしてか

ら19時までに帰宅。20時からは湯船に浸かり、21時から一人夕食を済ませ、22時からは明日の会議に必要な資料を制作するためパソコンに向かう。23時に軽く筋力トレーニングをして就寝、また朝の6時に起床するという大変規則正しい生活を送っていた。

休日は茶道の稽古をつけるため師匠の家に向かつて、図書館で学習をしたり、ジムで筋力トレーニングをしたりと多岐に渡る。特に茶道の「客人をもてなす」精神には彼も強く共感できるところがあるようで、上級免状を取得するほどには大分長く続いていた。

彼は孤独であることを好んでいた。どうやら他人との会話を苦痛に感じている節があるようだ。とは言え彼自身の社交性が皆無であるとは言いがたい。飲み会や麻雀に誘われれば断ることはないし、むしろそれを喜ばしく思っているぐらいだ。彼が苦手としていたのは、相手と一対一でコミュニケーションを取ることだつた。彼は極度の人見知りである上に、気の利いた会話や軽い冗談をばつと思いつくような人間ではなかつた。初めは天気の話や身の上話で何とか間を持たせることができた。しかし段々と話の種が尽きるに連れ、彼の口調は慌て始める。そしてつい相手に興味のない話を長引かせようとして失敗し、沈黙が訪れ、とうとう緊張して何も喋れなくなってしまうのだ。彼はそんな、会話を長引かせることが出来ない自分の不甲斐なさと、沈黙という空気の悪さを相手にも共有させてしまつた罪の意識から、段々と自分が孤立していくことに安心感を覚えて

いったのである。そのため彼は人との会話を必要最小限に抑えていった。彼が朝早くに出社し定時に退社するのは、通勤中出来る限り会社の知り合いと遭遇することを避けるためだった。彼が美容院でわざわざ無愛想な店員を指名するのは、お互い無駄な会話をせずに済むためだった。

3. 娯楽

ここまで書く読者の皆様には彼が毎日のようにコツコツとストレスを溜め込み、蠟燭をバーナーで着火し続けるかのごとく寿命をゴリゴリとすり減らしているようにも見えらるだろう。だが彼にはそんなストレスを一瞬で解消し、明日への活力を見出す特効薬があった。酒も飲まない煙草も吸わない女遊びもしたこと無い彼だが、唯一骨の髄までずっぽりとのめり込んだ娯楽があった。

一人カラオケ、通称「ヒトカラ」である。

彼とヒトカラの出会いには運命的だった。あれは三年前、まだ新人社員だった彼が取引先の相手に呼び出されて、近所のカラオケボックスに向かった時の事である。肝心の取引相手は急用が出来たとのことで早々に帰ってしまい、予約済みの部屋にはカラオケの力の字もよく知らない男と、除菌済みのマイクと、ついでにマラカスとタンバリンが残された。まあ予約した時間も終了まではまだ時間があるし、今帰るのももったいないからとりあえず歌っておくでしょう——これが後々彼に多大なる影響を与えることとなる、一人カラオケの始まりだった。

初めは彼が緊張していたこともあり、TVなどでよく聞いたことあるJ・POPや有名な歌謡曲などを淡々と歌っていた。だがそのうちに彼は、今この防音室には自分一人しか居ないという明確な事実に気がついたのだ。この限られた空間の内部では彼がアーティストであり、同時にオーディエンスでもあった。そしてどんな歌を歌おうがどんな踊りを踊ろうが、誰かに邪魔されることはなかった。彼は一人でカラオケを堪能している間自由だった。それは孤独であるから故に得られる真の自由だった。子どもの頃に聞いたアニメソング、誰も知らないようなマニアックな歌謡曲、必死に歌詞を覚えたエッチなアダルトソング……彼の知りうる全ての曲を口から吐き出し終えた時、時間は既に終了予定時刻を一時間過ぎていた。その後店員にはこっぴどく注意された。

それ以来彼はヒトカラを三ヶ月に一回のペースで堪能している。だが今現在における彼の洗練されたヒトカラは、綿密な予定を積み重ねた末に成り立っており、それはもはや遊びの範疇を越え一種の儀式と化していた。

まず彼はヒトカラの為に有給を使った。彼は一週間以上前からヒトカラする日を決定し、その日には必ず有給休暇を利用した。彼がヒトカラをするのはもっぱら平日の昼間だ。そんなの別に休みでも構わないんだから日曜祝日でもいいじゃないか、と思われる方も多いだろう。だが休日のカラオケ店は多人数で利用する客が多いため、回転効率の関係上一人でカラオケを利用する客は店側から入店を断られることが多い。彼は一度犯し

た苦い経験から、有給を使ってまで平日にヒトカラすることの利点を学んだのだ。

次に実際ヒトカラに行く日までの約一週間、彼はCDをレンタルし音楽番組に耳を傾けることで歌える曲のレパートリーを増やす作業に没頭する。通勤途中も音楽プレーヤーを片手に繰り返し繰り返し同じ曲を聞き、歌詞カードにも目を通すことで完全に記憶する徹底ぶりだ。当日歌う曲の順番も決められているのは言うまでもないだろう。

当日も抜かりはない。朝カラオケ店に連絡を入れ、一人客でも断られることはないかどうかと、予約客が一杯になっても部屋を追い出されることはないかを事前に確認しておくのだ。店の開店10分前に並び、いの一歩に入店してから堂々と一人でカラオケする旨を店員に伝える。それからフリータイム終了までの9時間、彼は「孤独」を十分に満喫しながら「規則」に従って歌を歌うことで、得も知れない快感に浸るのであった。

歌い終わった後はデータの収集にかかる。彼は家に帰ってから、その日歌った歌と採点点数の対応関係を全て表計算ソフトに打ち込むのだ。例えばこの曲は先月と比べて点数が上がっているとか、この新曲は点数が高かったから次回も歌おうだとか、そういう分析まですることによって彼のヒトカラは完結するのであった。

4. 仕事

彼の自己評価は低かった。どうしても自分で自分の行動に自

信を持たなかったのである。とは言え、勤務先の会社における彼の評価までもが決して低いというわけではなかった。彼の仕事に対する熱意は上司も一目置くものがあつたし、何よりも入社以来無遅刻無欠席であることがそれを裏付けていた。他にも取引先との商談の際には、必ず約束の10分前から既に資料を準備して待っていたりだとか、毎日17時にきっちり仕事を終わらせてから定時退社するので、今までの給料に残業代が含まれていたことはないだとか、連休明けの忙しい時期に有給をとる社員が多い今日この頃、そういうわけだが仕事がそれほど忙しくない平日に有給をしっかりと使ってくれる等等。会社としてもこれだけ有望な社員は手放したくないので、彼に対する周囲の信頼と人望は自然に高まっていた。これも彼の時間に対する極端なまでの正確性が、思わぬところで成した恩恵であろう。

業務成績も常に上位だったので、彼は会社の同僚からも羨望の眼差しで見られることが多かった。元々スラっとした身長に背広がよく似合う男だったので、ルックスの良さから男女共々人気があつた。皮肉にも彼の無口な性格に対して周囲の人間は、ああ、彼はきつと思慮深い人間なんだ、いつ見てもかっこいいなあ、という勝手な人間像を形づけていた。彼の普段何をしているのか分からないところも、人々の勝手な妄想を掻き立てたのだろう。実際のところ、彼は単に会話が苦手なだけだった。

さて、ここまで彼に関する紹介を述べれば、彼の考え方や性格などについて少なからず理解を深めることができたのでは無いただろうか。手前の長々とした導入もここまでとしておき、次

は8月からの彼に対する記録を淡々と記述する。

・記録日誌

8月1日

「ん？」

彼のマンションの前に何か転がっていた。ここからだと思ってよく見えないが、黒くて、ずんぐりとした、大きな塊だ。一見それは家庭ゴミだとか粗大ゴミの類のようにも思える。だが僅かな呼吸音と微々たる動きから、それが何らかの生物であることは容易に察しがついた。犬や猫が寝転がっているにしているのは小さいし、とは言え馬だとか牛のような巨大生物がこの近辺を闊歩しているとも考えづらい。となれば——それを見つけた事自体がやつかいになるであろうことは、彼も容易に想像ができたのだろう。人間が、それも年端も行かない少女が家の前でだらしなく寝そべっていたのだ。

彼は慌ててそれに駆け寄り脈をとった。続けて呼吸の確認、気道の確保と不慣れながらも一般的な心肺蘇生の手順をこなしていく。数年前彼が免許証を取得した際に学んでいたのは思わぬ僥倖とも言えよう。

「よかった……息はしている」

結果その少女は目こそ閉じていたものの、ちゃんと呼吸もしており、脈も正常であることが分かったようだ。とりあえずどうしたものか。この時間は人通りも少なく、マンション街だか

ら駆け込めるような家もない。かと言ってこのまま彼女を硬いアスファルトの上に寝かせたまま、というわけにもいかないだろう。彼は一頻り考えた後、やむを得ず彼女をお姫様抱っこの体勢で持ち上げ、自分の部屋まで運び込むことにした。

誰か知り合いに見つかると少々説明が厄介な状況ではあったが、偶然にも誰一人として顔を合わせることも無く彼女を部屋の中まで運び込むことができた。彼女の肉体を自分の寝床にそつと下ろし、布団を上からかけてやる。それから119番に電話をしようとした段階になって、彼は携帯電話の充電が切れていることに気づいた。仕事以外で電話することは殆ど無いというのに、こういう時に限ってツイていないようだ。こんなことならば入居時に固定電話を導入しておけばよかったから、などと彼はしきりにぼやいていた。

さて、充電が終わるまでの間どうしたものか。彼は彼女の目が覚めた時食べられるであろう簡単なものとして、とりあえず粥を作ることにした。

「ん……？」

しばらくしてから少女は、出来上がった粥の香りにつられて目を覚ました。彼女は辺りをキョロキョロ見回した後、キッチンに立つ男の姿を認識した。

「……誰？」

「む、気がついたか。調子はどうだ」

「……え、あ、も、もしかして」

「ん？」

「あ、あなたはひよつとしちゃって誘拐犯さんですか？」

「え」

誘拐、という単語を聞いた瞬間彼の顔から血の気が引いた。当然マンシヨンの前で寝転がっていた少女を保護しただけの彼に罪の意識はない。だが女性を自分の部屋まで連れ込んだという点だけ見れば、それほぼ誘拐という行為と同意義であった。彼は遠目から見てもよく分かるほど、明らかに動揺していた。

「まっまま待ちたまえ。私は道端に倒れていた君を自分の部屋まで運んだだけだ。決して何もしてないし、これから何もする予定はない……多分」

「えっ、多分!？」

最後に付け加えた一言が余計だったようだ。

「い、いやそうじゃない。そういうことじゃなくてだな。とにかく今から110番しよう。君もどこか怪我しているかもしれないし」

「110番……自首するんですか？」

「違う違う! 間違えた、110番じゃなくて119番だ119。君は気分が悪いだとか具合が悪いだとかはないのかね」

「え……あ、いや、特に無いので呼ぶ必要もないです」

「そ、そうか……それはよかった」

少女は初め男の不審さに警戒心を抱いていたが、徐々に自分の置かれている立場を理解し始めた。自分の介抱をしてくれた人間なのだから、少なくとも悪人というわけではないのだろうと気づいたのかもしれない。

「あの、今更ですけどありがとございます」

「ん、まあ当然のことだ。私の住むマンシヨンの前で倒れていたのだからな。君が化けて出てこられたら私も目覚めが悪い」

「……」

仕方ないことだが、男からは女性を気遣おうとする努力が感じ取れなかった。

「それよりどうするんだい。君は私を訴えるのかい？」

「へ?」

「仕方がないとはいえ、私は君を自分の部屋まで連れ込んでしまったのだ。君のいう通り誘拐犯だと訴えられたとしても何も文句は言えまい。何せ女子中学生に声をかけるだけでも、通報される現代社会だからな。女子中学生をお姫様抱っこして部屋まで運ぶなどという大罪を犯してしまったからには……」

「あ、いや、さっきは混乱していたからであって別に」

「誠に残念ではあるが私も男だ。この歳で前科がつくのは惜しいが罪を償うとしよう。まあこのまま私が捕まれば、会社で現在進行中の社運を賭けたプロジェクトは破綻、当然私もクビになるだろう。だがこれも全て私の軽率な行動が原因。さあ早く警察に通報してくれたまえ。さあ早く。さあさあ」

「ちよ、ちよつと、あなたはそんなに通報して欲しいんですか？」

「できればよして欲しい」

「そ、それじゃあ通報を取り下げてもいいですよ?」

「本当か、それは助かる」

「その代わり条件をつけましょう」

「聞かせてもらおうか」

ゲウウ、という腹の音が部屋の中に響き渡ると、瞬時に彼女の頬は赤く染まった。

「……そのお粥を少しだけ……」

「待ってました」

彼は答えを聞くまでもなく、盛り付けを既に始めていた。

「美味しい……」

「以前タイに独りで旅行した時食べたお粥を自分なりにアレンジした粗末なものだ。出汁は海老から、ガーリックとネギとパクチーを刻んでナムプラーを垂らした。美味しいか？」

「レンゲを動かす手が止まりません」

「それは何よりだ」

「ふう、ごちそうさまです」

「おかわりもあります」

「……いただきます」

「よく食べる奴だ。ああ、食べながらも構わない。こちらからいくつか質問してもいいか？」

「どうぞ」

「ええと、まず君のその制服……中学生か？」

「いえ、高校一年生です。身体が小さいのでよく間違えられます」

「そうか、失礼した。何処に住んでいる？」

「えっと、逆に聞きますがここは何号室ですか？」

「……？ 309号室だが……」

「じゃあそっちです」

「そっちって……方向で指されても」

「だからそっちの部屋です」

「へ？」

「隣の310号室ですよ」

「すると……君は私のお隣りさんだというのか」

「そういうことになります」

「隣は独身女性の一人暮らしと聞いていたが」

「最近引っ越してきたんです。親が単身赴任している間だけ親戚の叔母の元に」

「なるほど、合点がいった。どうだ、叔母さんは優しくしてくれるのか？」

「いえ別に」

「そうかそうか、それは何よりで……え？」

「引っ越してくるまで知らなかったんですけど、あの叔母さんってばパチスロ狂いだったんですよ。毎朝起きると机の上に1,000円と『今日はこれで過ごさない。私は駅前の店にいます』との書き置きが残されているんです」

「ひどい話だ」

「叔母さんが帰ってくるのはいつも深夜遅くなんです。お恥がしながら大飯食らいの私には、1,000円で一日の食費を賄うことができます。仕方が無いので最近バイトを始めました。今日私が倒れたのも疲労と空腹のあまりでして」

「ますますひどい話だ。私とその叔母さんの所まで抗議しに行っ

てもいいぞ」

「いえ、仕方の無いことです。ただでさえ養われている身なのですから、一日に1,000円貰えるだけでもありがたいことです。それに一概にパチスロをやめてくれとも言えないんですよ」

「何故だ」

「叔母さんにパートやバイトを勧めたのですが、三日で全て辞めてしまいました。彼女は性格上定期的な仕事が長続きしないのですよ。その割にパチスロでは安定して、一日一万円以上の純利益を得ているのです」

「しかしなあ」

「このまま叔母さんがパチスロをやめたら毎日の稼ぎが無くなつて、ものの三日で家計が破産します」

「お宅はどれだけ綱渡りな家計なんだか」

「叔母は金遣いが荒く、まるで江戸っ子のごとく宵越しの銭を持たない主義なのです。試しに私有家計簿をつけてみたところ、一日に入る収入と支出がピタリと一致していました」

「そりゃ豪快だな、困つたもんだ」

「ええ、私も困り切っているのです」

「一日1,000円の食費と言っていたが、最近は何を食べているんだ？」

「えっと、主に昼は学食、夜はコンビニ弁当などを」

「なんと言うか、腹に詰めるだけの食事という感じだな」

「まあそういうことになりますね。このお粥のような手料理な

んで久しぶりに食べました。まだおかわりありますか？」

「残念ながらも無い」

「はう」

「有り合わせでよければ簡単なものを作るが……」

「ぜひともよろしくお願いします」

「……ごちそうさまでした」

「結局冷蔵庫の中身を根こそぎ胃袋に持って行かれるとは……」
「どれも素晴らしい料理でしたね。いつかお礼をしてお返し致します」

「ああ、期待していないがぜひとも頼む」

「……おじさんは一人暮らしなのですか？」

「半分正解で半分間違っている。確かに私は一人暮らしだが、まだおじさんと呼ばれるほどの歳ではない」

「なるほど。そのスーツ姿から類推するに、おじさんはサラリーマンですね」

「まあそうだな」

「アラサーだというのに彼女の二つもできなくて、親からも会社からも結婚を勧められているとか」

「……何故知っている」

「凶星でしたか」

「余計なお世話だ」

《ピロリンピロリンピロリン》

「む、やっとな風呂が沸いたようだ」

「お風呂……」

「どうした」

「お風呂とは……浴槽に湯の溜まったお風呂のことですか？」

「まあ確かに世界的に見れば蒸し風呂だとか岩風呂も風呂のカテゴリに含まれるが、私の部屋にあるのは君の部屋と同じユニットバスだ」

「私、ここ最近シャワーしか浴びてなくて、湯に浸かった覚えがないのです」

「そうか。では君も部屋に帰って浴槽に湯を溜めればいいじゃないか」

「それができないのです。浴槽の栓が壊れてしまいました」

「それなら大家に言って直してもらいたまえ」

「叔母は修理に金がかかるので駄目だと」

「いや、マンションの設備に関しては敷金から出して貰えるはずだ。基本賃貸マンションの修理は大家の義務になっている。確か入居の時に説明されたはずなんだが……きつとその叔母さんも忘れてるんだろ。明日にでも大家のところに行つてこい」

「……」

「ん？」

「……あの」

「ひよっとして我が家の風呂に浸かりたいのか？」

「……は」

「まさか今日初対面の上一人暮らしの男に、風呂貸してくれなと頼む女子高校生が実在するとはな。大体私が悪人だったら

どうするんだ。君はもう少し人を疑うということをやんだ方がい」

「ちゃんと初対面で誘拐犯かどうか聞いたじゃないですか」

「おっと、それもそうだったな」

「えっとそれじゃあ駄目、ですか？」

「……別に駄目だとは一言も言っていない。タオルと洗面用具一式は貸してやるが、さすがに女性物の下着はないから。自分の部屋から取つてこい」

「いいんですか」

「別に断る理由もない。ああそうだ、脱いだ制服はネットに入れて洗濯機の中に放り込んでおけ。ついでに洗濯もしてやる」

「しかし明日も学校が……」

「安心しろ。我が家の最新鋭洗濯機にはちゃんと乾燥機能まで付いている」

「素敵……」

「独り暮らしは何かと金有り余るのでね」

「となれば、着替え持つてきますね」

「そうか、行つてこい」

彼女は久々の入浴に心を踊らせているようだ。

「ふう……」

「お、もう上がったのか」

「ええ、いい湯加減でしたよ。覗きに來ないか不安でしたが」

「安心しろ。私の性的嗜好もそこまで若々しくないし、この年

で無職にジョブチェンジして路頭に迷いたくはない」

「あら、命の恩人を通報する気なんて微塵もありませんよ」

「そうか、それは惜しいことをしたな。では後で私も入るとしよう」

「洗濯はまだかかりますかね」

「後15分で乾燥まで終わる。もう少し我慢しろ」

「……暇です」

「そうか、私は忙しい」

「構ってください」

「残念ながら忙しくて君に構う暇がない」

「そうですか……」

「……分かった、そのこの棚にある漫画と本自由に読んでいいぞ」

「やった、ありがとうございます」

「ねえおじさん」

「だからおじさんって年じゃ……何だ？」

「何でこの棚、横山光輝の三国志しかないんですか」

「仕方ないだろ、私が好きなんだ」

「だってキャラの区別が難しいし、セリフも『こやつ首をはねい！』ばっかりだし、正直展開も繰り返すし」

「何を言っているんだ。王の栄華と暗殺が何度も繰り返される中国史を淡々と描いた超名作だろ。嫉妬、恨み、出世欲から暗殺を実行した者が、今度は暗殺の対象になる。そういった歴史

の繰り返しが実にエキサイティングで、現在の中国からは考えられないほど血生臭く、そしてクレイジーなのだ」

「うーん、そういうものなんですかね」

「そういうものだ。君も大人になれば分かる」

《ピーッピーッピーッ》

「む、乾燥も終わったか」

「あ、それじゃあ私取り出してきますね」

「ああ、取り出した制服はこっちに持ってきてくれ」

「へ？」

「何を言っている、まだアイロンがけが済んでいないだろう。」

私がかけてやる」

「あ、これはわざわざどうも……」

「何と言うか、アイロンがけ上手ですね」

「まあ毎日のようにYシャツをアイロンがけしているからな。」

手が動きを覚えている」

「お母さんみたいですわね」

「もう三十に近い独身男性だぞ、馬鹿な事言うな。ほら、こんなもんかな」

「ありがとうございます……。何というか、すっかり長居してしまいましたね。ご迷惑をお掛けしました」

「いや、一向に構うことはない。体調はもう大丈夫なのか？」

「はい、すっかりピンピンです」

「それはよかった。お腹が空いたらこの部屋まで来い。飯ぐら

いなら用意してやる」

「本当ですか？ じゃあまた遊びに来ちゃいますからね、おじさん」

「またおじさん、か。私ももう若くないという現実を目を向けなければならぬのだろうか……直視したくないものだな……」

「何独りでアンニユイな気分浸ってるんですか。それじゃあ長い間お邪魔してしまいましたね、おやすみなさい、おじさん」

「ああ……うん、じゃあね。おやすみなさい」

男は若干複雑な心境で女を玄関口まで見送ると、壁際の時計に視線を傾けた。

「もう23時か……」

男はクタクタになつた身体を引きずつて風呂に浸かり、さばの缶詰で夕食を簡単に済ませ、布団に倒れ込んだ。

「何というか……こんなに長い間人と会話したのは、久しぶりではないだろうか……」

男は他の誰に聞こえるでもない独り言を、ぼそりと口から吐き出して寝た。

8月2日

その日の帰り、彼はまたしてもマンシヨンの前に寝転がる生物を目撃した。彼は近づいて確かめる間でもなく、今度はすぐその正体に気がついたようである。

「おい、君はそんなところで何をしているんだ」

「……お腹が空きました」

「別に気を失つてないなら倒れる必要も無いだろう」

「こうしていればまた昨日みたいに助けてくれるだろうと。これこれ1時間ぐらいついて待機してました。通行人の変なものを見るような目が辛かったです」

「君は救いようのない阿呆だな……ついて来たまえ」

「待ってました」

彼女はむくりと起き上がり、彼の後を追う。昨日と同様に夕飯をごちそうになり、三国志を読んだ後、日が変わる前に彼女は自分の部屋に戻っていった。こうして今後も続く彼女の寄生生活は一定のパターンを獲得したのである。

8月3日

その日も彼女は男の家で無防備に寝転がっていた。

「ちょっと聞きたいことがある」

「何でしょうか」

「何故君は今日も私の部屋にいるんだ」

「だって部屋に戻つても誰もいませんし、夏休み始まったからすることも無いです」

「夏休みの宿題はないのか？」

「……」

「ほら、早めにやっておけ。後で泣きを見ても知らんぞ」

「面倒くさいです」

「面倒でもそういうことは夏休み初頭にやっておくものだ。私

「が分かる範囲なら君の分からないところも教えてやる」

「本当ですか」

「本当だ、さあ今すぐ宿題を持って来い」

「はあ……何て言うか、おじさんては本当クソがつくほど真面目ですよ。なんかもつところ、『学生は今すぐ教科書を窓から投げ捨てて、日本をブルジョア思想の支配から脱却する革命運動を成し遂げるべきだ！ 総括！』みたいな面白いことを絶対言わなさそうな人種ですね」

「それを面白いと言える君のセンスは、申し訳ないが私にはちよつとよく理解できないな。だが人間コツコツと真面目に生きるのが、何だかんだでもつとも効率が良く無駄がない。この歳まで生きてきてやつと学んだことだ。くれぐれも君はやくぎな道を踏むんじゃないぞ」

「はいはは」

「それじゃあ早く宿題を持ってきたまえ」

「はいはは」

「何故君は動かないのだ」

「はいはは」

「もう教えてやらんぞ」

「はいはは」

男はいつまで経っても動きを見せない彼女に心底呆れ返ったようだが、少し楽しそうな表情を浮かべていた。

8月4日

彼女は重い腰を上げ、やつとのことで宿題に取りかかり始めた。

「今数学は何をやっているんだ？」

「二次関数です」

「懐かしいな。数学は好きか？」

「いいえ特には」

「何故だ」

「何で放物線が上下左右に移動したり拡大縮小したりするのを、いちいち計算で求めなければならぬのか理解に苦しみます」

「ほう、なかなか面白いことを言うな」

「面白く無いです。こちらとしては切実な問題なんです」

「随分辛そうだな。どれ、おじさんが分からないところを教えてくださいあげよう」

「ちよ、顔近いですって、警察呼びますよ」

「はあ……なるほど、ここの数字が間違っている。で、結果としてこの計算がずれている」

「あ、ほんとは」

「なんだ、こども、こども計算ミスじゃないか。どうやら君は数学に関して問題ないようだが、算数に難があるようだな」

「……ぐぐぐ」

「何、そんな顔を真赤にしてまで悔しがることではない。誰にだって計算ミスはあることだ。」

「うっさく」

「はい。……ところで君は教科の中で何が一番好きだ？」

「私は現代文ですね」

「現文か、私は苦手だったな」

「どうしてですか？」

「とにかく私は人間の感情を読み取るのが苦手なんだ。自分の事ばかり気にして、相手の事まで構う余裕がない。見方によっては、自己尊重主義の浅ましい人間とも言えるだろう。私はそんな奴だ。だから論説や物語を読むこと自体嫌いではないのだが、登場人物の立場に立つて物事を考えることが出来ない。というわけだから設問で聞かれてもさっぱり分からないのだ」

「……なんかそういう症状をテレビ番組で見た気がしますね。確かアスペ……」

「ん？」

「あ、いや何でもないです」

「む、そうか」

「えっと、それじゃあおじさんは、例えばセンター試験の国語とかをどうやって乗り切ったんですか？」

「ん？ 漢字と古文漢文で何とか点を稼いだよ。こっちはまだ知識問題が多いからな。全部頭に詰め込んで覚えていれば解ける」

「……」

「ああ、ちなみに数学と物理、化学は得意だったぞ。どれも模試で9割は固かった」

「何て言うかおじさんって、バリバリの理系ですね」

「よくそう言われる。……それにしてもお腹が空いたな」

「そうですね」

「今日は素麺でもいいか」

「いいんですけど……こんなに毎日毎日夕飯を頂いてもいいのでしょうか」

「なに、実家からよく仕送りが来るから食べる物は余っているぐらいだ。一人ぐらい増えたところで変わりはない」

「それじゃあせめて……料理の準備と後片付けぐらいは手伝いますよ」

「む、そうだな。それじゃあ頼むでしょう。冷蔵庫からキュウリを取り出してくれ」

「はい」

彼女はすっかり通い妻気取りだった。

8月5日

彼女は突如天高く拳を突き上げた。

「うわ、びっくりした。何があつたんだ」

「数学の宿題がやっと終わりました……」

「そうか、お疲れ様。他の宿題はないのか？ 自由研究とか」

「おじさん、自由研究なんて中学で終わらだよ。高校ではもう宿題として出てこないんだよ……」

「何だと、何故だ！」

「うーん、まあ高校生は何かと忙しいからじゃないですか。自由研究なんて時間のかかる宿題はいちいちやってられないとか。でもその代わり学外で自由参加型の全国自由研究大会みた

いなものはありますよ」

「そうか、あれは夏休みの宿題の中でも一二を争うほど好きだったんだがな。後はほら、毎日アサガオの日記をつけたりとか、観察日記だ。ああいうのは宿題じゃないのか？」

「おじさん、そんな宿題出されるのは小学生までだよ」

「……ふつ、これも時代というやつか。私も歳を食ったものだ」

「いや、時代というよりはおじさんの記憶違いだよ」

「そ、そうか、そうだよな」

「あ、そういえば」

「どうした」

「明日は朝から友達とプールに行つてきます」

「そうか、じゃあ夕飯は食べてくるのか」

「いえ、明日夜の8時には帰ってくるので、それまでに夕飯を準備しておいてください」

「君は何と言うか、しっかりとしているというか、ちゃっかりしているというか……まあ別に私は構わないが。何か食べたいものはあるか？」

「そうですね、夏っぽいものが食べたいです」

「夏っぽい……？」

「あ、それでいて肉肉しい、ボリュームのあるものが食べたいです」

「肉……？」

「でもやっぱり暑いですし、さっぱりしたものもいいですね」

「つまり君は何が食べたいんだ」

「沖縄そばです」

「分かった、次は始めからそう言ってくれ」

男は冷蔵庫のメモに「沖縄そば」とだけ書き込んだ。

8月6日

約束通り彼女は夕飯時に飯を食うため帰ってきた。

「ただいま」

「む、遅いぞ。8時をもう2分も過ぎてている」

「はいはい、相変わらず時間に厳しいんだから。それにしてもこの部屋暑いですね」

「そりゃ夏だからな」

「冷房弱くないですか」

「電気代がかさむ。それに私は冷房の冷風が嫌いなのだ。扇風機で我慢しろ」

「おじさんって真面目な上にドケチですよね」

「余計なお世話だ。ほら、ご注文の沖縄そば出来たぞ」

「わーい」

「待て、いただきますだ」

「いただきます」

「うむ、よろしい」

「……ねえおじさん」

「なんだ」

「こんなうら若き乙女と一つ屋根の下で、毎日食事で嬉しくないんですか？」

「別に普通だ」

「普通ってなんですか」

「可もなく不可もなく、といったところだ」

「さりげなくひどいですね」

「別に素直な感想を言っただけだろうが」

「はあ……そんなんだからおじさんは彼女の一つも作れないんですよ」

「余計なお世話だ。そういう君もどうせ彼氏と名のつく男はいないだろう」

「その通りですが別に構いません。独身の方が女としての風格がより高まるのです」

「今のうちに言っておけ。そのうち私のように独り身になってから後悔するからな」

「へえ、後悔してるんですか」

「……」

「おや、凶星でしたか。実は彼女が欲しくて、内心では寂しがっているとか」

「……いいから黙って食べる。麺が伸びても知らんぞ」

「はいはい。ところでおじさんに一つ疑問があります」

「どうした」

「先ほど彼氏が作れないという話をしましたが、実は私、異性と会話するのが大の苦手なんです」

「へえ」

「今日もナンパ？　と言うのでしょうか、我々の集団に男性複

数名のグループが声を掛けようと接近して来まして」

「なんと、けしからん」

「私の友人達は『え〜うっそ〜やだ〜』などと言いながら、彼らと歳相応に瑞々しい会話を繰り広げておりました。しかし私は声を掛けられた途端、緊張で喉元がひっついて喋れなくなっ

てしまいました。とりあえずトイレまで逃げこんで、彼らの集団が自然に離れるのをただひたすらに待ち続けておりました」

「それは災難だったな」

「というわけで私は男性や初対面の方と会話すると、すぐに上がって何も喋れなくなるんです」

「普段の様子を見る限り、そうは思えないがな」

「それなんです。で、質問というのは、どうして私はおじさんと会話してる時だけ緊張しないんでしょうか」

「それは……きつと私と君が似たような人間だからだろう」

「似ている？」

「ああ。私も君と同様に、初対面の人間と会話するのが苦手なのだ。特に普段女性の前だとつい縮み上がってしまい、満足に喋ることすらも難しい」

「そうは見えませんか」

「だろう？　つまり我々は極度の人見知りであるという観点において同族ということだ。同族ならば人見知りもそこまで激し

くない。適当な推論だがそんなところじゃないのか」

「なるほど。にしても意外ですね」

「何がだ？」

「おじさんぐらゐのルックスなら、女性社員とも自然に世間話を交わしてそうだと思いますよ」

「まあ事務的な会話ぐらゐならな」

「そんなの会話のうちに含まれんて。おじさんはもつと社交的になるべきです」

「言われなくても努力はしているよ」

「いくら努力しても結果に結び付けなくては意味がありません。とりあえず異性の友人を作る、なんて目標を立てたらどうですか？」

「どうして君に決められなくちゃいけないんだ。それに……その目標なら既に概ね達成している」

「へー、これまた意外ですね。どんな友人さんなんです？」

「さあな。こっちが一方的に友人と認識しているだけで、向こうはどう思っているのか分からん。いや、友人というよりは今まで来て飯を食べて帰っていく扶養者みたいな女性とだけ言っておこうか」

「へー、それはまた図々しい女性ですね」

「そうか、自分でそう言えるなら大したもんだ」

沖繩そばを啜りながら長々と続く、彼らのとりとめのない話
は結局夜遅くまで続いた。

8月7日

その日は朝から二人で部屋の掃除をしていた。

「おじさん、こっちのゴミ箱の中身も捨てておきますね」

「うむ、頼んだ」

「ん？ 何かたくさん入ってる……包まったティッシュの塊……？ それに何か変な臭いがする……」

「ああ、それは使用済みのティッシュだ」

「使用済み……？」

「床にこぼしたのを拭き取ったものだ」

「拭き取り……？」

「分からんやつだな。確か保健体育の時間とかに勉強しただろう」

「なあっ！？ ま、まさか……こ、これは……噂に聞くタンパク質の塊……」

「ん？ まあ、確かにそうだな」

「なっ、なな何してるんですか！ それにこんな量ってあなた……」

「……？ まあ確かに女性からすると理解できないのかもしれないが……。こういったことも男の性だ、多少は目を瞑れ」

「瞑れません！ おじさんも自分の年齢考えてくださいよ、性欲旺盛な中学生じゃあるまいし」

「既に日課として日常に取り込まれたものだ。今更他人にどうこう言われる筋合いはないだろう」

「日課って、それじゃあ私が部屋に戻った後毎日……」

「まあそういうことになるな。なかなかスッキリして気持ちがいいものだぞ。夜ぐっすり眠れる」

「し、信じられない……とんでもなく助平な下半身さんですね」

「褒めても何も出んぞ」

「別に褒めてません。それよりおじさんはもつと恥じらいという感情を顕にしたらどうなんですか」

「そうか？ 恥じるような行為は何もしていない」

「呆れた……仮にも女子高校生が半同棲している部屋なんですよ。もう少し節度を持って頂かないと」

「では逆に聞かせて頂こう。夏休みに入ってから君とほぼ常時部屋に二人きりだというのに、いつ暇があるというのだ。君が部屋に戻ってからこつそりと夜に運動するしかないだろう」

「……そ、それはつまり、私を女として意識している……という事で、宜しいのでしょうか？」

「意識しないわけがないだろう、君は何を言っているんだ」

「……」

「どうした、顔が赤いぞ。熱でもあるのか。夏風邪でもひいたか」

「かつ、かか、帰ります！」

「夕飯は食べていかないのか」

「また夜になったら来ます！」

「何か食べたいものはあるか」

「ちゃ、ちゃーはん！」

「分かった、準備しておく。ところでどうやら君は、普段感情を表に出さないような心がけているようだ……」

「な、何ですか？」

「もつとそうやって感情を顕にした方がいいと思うぞ。その方が可愛げがあつて歳相応だ」

「……っ！ よ、余計なお世話です！」

「あらら、帰ってしまったか、後で夜の筋トレは健康にもいいから勧めようと思つていたんだが……。お、そういえば今日の分はまだだったか」

そういつて男は戸棚からプロテインを取り出した。

「しかし昨日中身を床にぶちまけたのは本当にもつたいなかったな。慌ててティッシュで拭き取ったものの、結構な量を無駄にしてしまうとは……」

その夜彼女は悶々として中々寝付けなかったという。

8月8日

「ストーカー？」

「はい。ここ最近誰かに付けられている気がするんです。買い物をする時だとか遊びに行く時、誰かに見張られている感じがして」

「自意識過剰じゃないのか」

「ええ、私自身もさつきまでそう思っていたんです。ところがこれを見てください」

「何だ？」

「この前プールに行った時の写真を現像したものです」

「どれどれ。ほう、君は結構いいスタイルをしているな」

「ええ、これでも中学生まで水泳を……って、私の身体についてはどうでもいいんです。ほう、ここの隅っここのところを見てください」

「ふむ、怪しい男がいるな」

「はい。こんな炎天下の中、首からカメラをぶら下げた黒尽くめの男がこちをずつと見ているんですよ。もう怪しいなんてもんじゃありませんね。こいつが間違ひなくストーカーですよ」
「とは言え彼は、たまたまプールに来た君達の水着姿に欲情している只の変態かもしれないじゃないか。ストーカーとは限らない」

「……他の写真も見ましたか？」

「他の？ げっ……」

「ええ、そうなんです。私達が撮った写真全てのどこかに、その男が必ず映ってるんですよ」

「本当だ、至る所に。ウ○リーを探せみたいな事になってるな」
「それだけじゃないんです……。何枚か写真に写っているその男を比較してみてください。何か分かることはありませんか？」

男は複数枚の写真を見比べ、そこから結論を得た。

「……男がカメラを構えている写真と、そうでない写真がある。さらに男が構えている時は、君が集合写真に写っていない」
「名答、さすがおじさんですね。つまりその男は私がカメラを構えている時に、『写真を撮っている私の姿』を撮影しているんです。こいつの撮影対象は、ずばり私です」

「しかし、何故そんなことを……」

「ええ、それもちょっと考えてたんです。それで、ひよっとしたらこの男は私に気づかれないよう隠し撮りをしたかったんじゃないのかなって。実は写真を撮っている時、撮影者は意外

と被写体以外の物に関心が向かないんですよ。特にこういった集合写真を撮る時は、全員顔と風景がそれっぽく収まっていれば十分です。通行人は皆エキストラみたいものですから。だから逆に言えば、フアインダーを一生懸命覗き込んでいる人間って、平常時の人間よりも隠し撮りしやすいんじゃないかな、なんて」

「確かに君は写真が現像されるまで、男の存在に気づかなかったようだしな」

「そうなんです。もしくは……只ストーカーキングしているという事実を、私にアピールしたかっただけなのかもしれない」

「何にしる薄気味の悪い話だ」

「ええ、でもここまでの話は憶測に過ぎません。一つストーカーがつきまといっているという明確な心当たりがあります」

「何だ」

「昨日おじさんに頼まれて、ゴミを捨てに行った時の事です。あの時は確か捨てるゴミが三袋あったので先に二つゴミ捨て場まで持って行って、後から最後の一つを持ってきたんです。で、1往復してからまたゴミ捨て場まで来たら……」

「無かった、とか」

「はい、跡形も無く綺麗さっぱりと。しかも無くなっていたのはこの部屋から出たゴミだけでした。あの時は業者が先に運んでいったんだろうとも思っていました、当然そんなはずもなく……」

「何ということだ、これからは捨てるゴミにも気を使わなくて

「はならないってところか」

「すみませんおじさん、何とか私のせいで」

「ん、いや、そんなことはない。気にするな。とにかく危ないと思っただけ、私が警察に相談したまえ」

「努力します。あ、親子丼のおかわり貰っていいですか？」

「確かフライパンにまだ残ってたはずだ。どうぞ」

「わーい、いただき……あれ？」

「どうした」

「ああ、おじさん三国志の順番揃えておいてくれたんですね。わざわざすみません」

「三国志？ 何のことだ」

「え？ この前私三国志読んでたじゃないですか。で、帰り際になつてから慌てて本棚に差しこんだので、各巻の位置がバラバラに入れ替わってたんですよ。今度来た時に戻しておかなくちゃと思ってて」

「ちょっと待った。私はここ一週間その三国志にまったく触れていないぞ。そもそも三国志の順番が入れ替わっていることに今気づいたくらいだ」

「え、じゃあ一体誰が入れ替えを？」

「この部屋に入れる人間は君と私以外に考えられない。だがその両者が否定している、となると……」

「……」

「……」

僅かな沈黙が二人の会話に挟まれた。

「いやいや」

「そんなまさか」

「い、いやー。それにしてもこの親子丼美味しいですね！」

「お、おう。君もなかなか料理上手じゃないか。これなら明日の夕飯もお願いしたいくらいだよ」

「……え？ これおじさんが作ったんじゃないですか？」

「何を言っているんだ。今日は帰りが遅くなるから夕飯を作っておいてくれて、昨日君に頼んでおいたじゃないか」

「いや、これ冷蔵庫のジップロックに入っていたものを温めた直しただけですよ。そもそも私料理一切出来ませんし。おじさんが作り置きしておいたのかなと思って」

「いや、今冷蔵庫に作り置きは無いはずだ。どうせ作っても君が全て食べてしまうからな。それにここ最近親子丼の具を作った覚えなんてないぞ」

「え、じゃあ一体誰がこの親子丼を」

「……」

「……」

今度は気のせいではない、明らかに静寂が訪れた。

「……ごちそうさま」

「私もごちそうさます……。あつ」

「どうした」

「今窓の外に誰か……いや、何でもありません」

「そうか……ここ3階なのだが……」

「多分見間違えですよ……はははは」

「そうだといいんだがな……」

彼らにはもはやこれ以上ストーリーカーの存在を否定する気力が起きなかった。ストーリーカーに該当する人物は明らかに存在し、今も彼らの一挙一動を見守っていたのである。

8月9日

夕暮れ時になってから彼が帰宅してきた。

「只今帰った。相変わらず今日も蒸し暑いな……」

「あら、おかえりなさい。はい、冷たいお絞り」

「おうサンキューな」

少女の方も大分通い妻として板がついてきたように見える。

「それで、どうだったの？」

「ああ、やはり駄目だったよ。警察というところは被害が起きてからでないと動かないというのは本当だったな。ストーリーカーが家に侵入して三国志を順番通りに並び替えていることや、親子丼を作り置きしていることを力説してきたが、聞く耳持たずといったところだ」

「そりゃそんなストーリーカーこつちから存在を信じたくないですよ」

「とにかく対策を考えなくてはな。まあ恐らくちよつかいを出してくるだけで、本質的な書を与えるとは思えないが……いや、まさかな」

「……？」

「おっと、とりあえず家主に頼んで鍵を変えてもらうことにし

た。君も一人で家の外を出歩くのはできるだけ控えた方がいいだろう」

「はあ、せつかくの夏休みが……」

「仕方ない。事件に巻き込まれるよりはマシだ」

「まあどうせ夏休み中はバイトしかやることありませんけどね」

「とにかく外出する時はくれぐれも気をつけるんだぞ。あ、そういうえは」

「どうしたんです？」

「私は諸用で明日一日中家を留守にする」

「どこか出かけるんですか？」

「ああ、まあそんなところだ。鍵を預けておくので留守番を頼んだぞ。くれぐれもしっかりと戸締まりをするように。できるだけ早く帰ってくるようにはするが」

「はい」

「さて、明日に向けて準備をしなくては。何せ3ヶ月ぶりだ、今日は早く寝るとしよう。フフフ……」

「……？」

男はPCの画面とにらめっこしながら、不敵な笑みを浮かべた。

——無い……どこにも無い……どこかで落としたのでしょうか……？ あのノートが無くては……いや、それよりもあのノートが誰かの手にでも渡りでもしたら……早く探さなくては

参考資料2 観察記録2

8月10日

「暑い……」

彼女はバイトから帰宅し、そのまま男の部屋に倒れこんだ。しばらくしてから思い出したかのように冷房の電源を入れ、冷蔵庫から麦茶を取り出し、コップ一杯に注いでから一気に飲み干す。

「ふいー、涼しい涼しい……」

彼女は部屋に男がいないことを少し不安に感じたのだろうか。そわそわとしながら部屋の中をぐるぐると回っていたが、そのうちにベッドの下や押入れの奥など人目につかないところの探索を始めた。大方何か如何わしいものが無いか探しているのだろう。

「無いか……そうだ、ついでだし掃除でもしよう。うん、おじさんが喜んで褒めてくれるかもしれないし……」

彼女は突如美意識に目覚め、掃除を始めた。はたき、コロコロ、そして最後に掃除機をかけていると、足元に転がっているノートが目に入ったようだ。

——……あれは！「僕」にはあのノートに見覚えが御座いました。当然といえば当然です。あれは「僕」がつい昨日まで使っていたノートなのですから——

「ん、なんだこれ……観察記録……？ おじさんにも夏休みの宿題が……って、そんなわけないか」

——彼女は「僕」のノートを開き閲覧しております。ああ、駄目です。もう無理です。さすがにこれ以上は限界でございます。「私」は思わず彼女を呼び止めてしまい、しまったと思った頃には既に遅く——。

「そのノートに触るな！」

参考資料3 とある女学生の日記

8月10日

親愛なるキティーへと言えば、かの有名なアンネの日記に出てる書き出しだったかと憶えております。私もこの日記の書き出しに、これぐらいインパクトのある表現をいつか用いてみたいものです。とは言え実在しないキティー君に手紙を差し出すほど私と彼女の仲は良くはないですし、現代ですとハローな感じの某マスケットキャラクター企業から訴訟されそうなので、何か代用案を考えておきたいと思えます。これは明日までの課題ですね。

さて、そんなことより今日は驚くべき大事件が起こりました。この恐るべき出来事を私の貧相な文章力で伝えることができる

かは分かりませんが、とりあえず忘れないよう日記に付けておきます。

まずここ数日の通例に従って、話はおじさんの家に帰ってきから始まります。一息ついてから、私は珍しく部屋の掃除をしていました。部屋に一人できるとそんな殊勝な心がけが芽生えるものなのでしょうか。ついでにおじさんが何か如何わしいものを隠し持っていないか押入れ棚の奥を一応探しては見ましたが、ハンガーにかけられた黒いレインコートと山のように積み上げられたDVDケース程度の目ぼしいものしか見当たりませんでした。一応DVDの中身が淫靡な物体だったのかも知れませんが、おじさんのPCはパスワードでロックされていてログインできません。今日のところは勘弁してあげましょう。諦めて真面目に掃除を続けていると、カーペットの上に置かれた一冊の大学ノートに気がつきました。汗ばんでヨレヨレになった表紙と四隅の端っこがボロボロになった背表紙から、随分と使い込まれた印象を受けます。表紙には「観察記録 8月」とだけ書かれていました。観察記録？ まるで夏休みの宿題のようなタイトルですが、言うまでもなく私のものではありません。おじさんがこまめにつけているものでしょうか。一体何を観察しているのでしょうか。私は次々と浮かび上がる好奇心に駆られ、つい思わず表紙を捲つてしまいました。すると。

「……分析と考察

その男は生真面目だが、少し神経質の過ぎるところがあった。常日頃から他人に悪い印象を持たれないよう心がけた結果、あ

まりにも卑屈で根暗な一人の人間が出来上がってしまったのだ。彼はその寡黙な性格と大柄な体型から、威圧的な態度を前面に出しているよく相手に勘違いされることが多い。だがその心臓の大きさは……」

おおまかにはこのような内容が、綺麗な手書き文字で気持ち悪いぐらいにびつちりと書き込まれていました。次のページ以降も同様です。何？ 何なのこのノートは？ 一体何の目的で書かれたの？

少し落ち着いて考えてみましょう。ここで言っている男というのは、何となくですが性格的に見てもおじさんのことを彷彿させます。そしてこのノートの書き手はおじさんのことを「その男」と呼ぶ別の人間です。だとすればこの記録を書いている人間と言うのはつまり――

「そのノートに触るな！」

私の脳内での問いかけに対して、叫び声が答えました。いきなり窓が開き、ベランダから男が部屋に入ってきました。黒いハチング帽子、黒いジャケット、そして黒ずんだジーンズ。男の顔に見覚えが無くとも、その黒尽くめの格好からすぐにある人物が思い当たります。あの時プールで私を盗撮していた男です。彼の血走った目の下にはうっすらとクマが浮かんでおり、その顔には溢れ出る怒りをそのまま具現化したかのような表情が張り付いていました。

「ひっ……ひっ……」

私は恐怖のあまり、思わずノートを掴んで逃げ出しています

た。同じ部屋の中とはいえ、あの不気味な男からは1cmでも遠くに離れると直感が告げていたからです。しかしこれからどうすればよいか。何処に向かえば良いのか。ふとキツチンにある包丁のことが思い浮かびました。私がいくらひ弱な女子高生とは言えど、こちらが包丁を構えていれば手を出されないはずです。

私が戸棚から包丁を探している間、男がキツチンに向かってゆつくりと歩いてきました。走ってくれば間に合うだろうに、何故かゆつくりと。身長は190cm近くあるのでしょうか。段々と距離が近づくに連れ、男の図体から生まれる威圧感が私を圧迫します。やつとのことで包丁を握りしめて男と対峙しましたが、状況は一変しません。

「お、お願いします……これ以上私に関わらないでください……」
「……」

どうやら私の精一杯の主張も男の耳には届かなかったようです。男は無言でゆつくりとこちらに近づいてきます。私は恐怖で震える指先を無理矢理筋肉で抑えこみ、両手で包丁の柄をしつかりと握りこんでいました。不思議なことですが、食材を相手にするとあれだけ鋭利な包丁という刃物が、この男を前にするとおままごとで使うプラ包丁ぐらいいは頼りなく見えませんでした。

「返せ……」

男はそつと右手の平を広げ、包丁の峰を上から覆い被せるか

のように掴みこみました。包丁は上から切れないという、武器としての致命的な弱点を突いたのです。そのまま包丁の主導権をあつという間に奪い取った男は、それをゴミ箱に放り投げ、改めて私の前に立ちほだかります。

これから私は何をされるのでしょうか。殺される？ いや、それならもうとつくに死んでいてもおかしくはありません。では誘拐されて監禁？ 十分にありえます。それとも性的な暴行を……？ これから私が被るであろう残酷な処遇のことを考えると、膝が震え、指先も震え、止めどなくあふれ出る涙を抑えることができませんでした。

「助けて……ください……。お願いします、何でもしますから……」
「……」

そのまま男はゆつくりと右手を伸ばし――

――私の左手からノートを奪い取るとダッシュで走り去りました。

「へ？」

もう男は私の方に一瞥もくれませんでした。そう、あの男は最初から私に興味なんてなかったのです。あいつの狙いはあのノートただ一冊だったのです。……急に緊張の糸が切れたので、どつと疲れが出ました。思わずその場でへたり込みそうになりましたが、すんでのところどころええました。まだ私の仕事は終わっていません。あの男を追わなくては。私があつた男を警察に

突き出さない限り、これからの日々には平穏な日常は訪れません。

男は玄関ではなく、ベランダの方へ向かって走りました。当然そっちは行き止まりだと分かっているはずですが。しかし彼は窓を開けるとベランダの手すりを掴み、なんとそのまま——地上に飛び降りました。男は車の上に直撃し、バオンという鈍い音が周囲に響き渡ります。私は慌ててベランダから身体を乗り出し、男の姿を捉えました。男は受け身を取りそこねたのでしようか、右腕を痛そうに抑えながらマンシヨンの駐車場をそそくさと去っていきます。とは言え、これで私が彼を追跡するのは非常に難しくなりました。彼と同様に3階から飛び降りるのは勘弁したいですし、かと言って今から玄関に回って、階段を降りて、裏口の駐車場に回って……などと悠長に事を済ませていたら男の姿が見えなくなります。ああ、どうすれば。一体どうすればいいの——。

その時駐車場の向こう側からおじさんの姿が見えたのは、きつとご都合主義的奇跡が起こったに違いありません。

「おじさん！」

「あれ、どうしたんだね君」

「その右腕を抑えてる男！ ストーカー！」

「何！？」

「丁度ストーカー男とおじさんの目が合いました。」

「あ」

「あ」

「まあやっぱりお前か。そんな気はしていたが……」

「……面目ない」

一瞬間き間違いかと思いましたが、どうやらおじさんとストーカー男には面識があるようです。

「ふんっ！」

「うげえっ」

おじさんの右手から放たれたリバーブローは、的確にストーカー男の脇腹を捉えました。男はたまらず卒倒します。

「おーい、すまないが君。部屋からロープとハサミを持ってきてくれたまえ」

「あ、はあ……」

もう私には何が何だか訳が分かりませんでした。

こうしてグルグルにふん縛られた件の変質者は、警官に連行されていきました。あまりにもあつという間に起こった出来事だったので、今でも本当に起こったのか信じがたいぐらいです。その後私達は簡単な事情聴取を受け、後日また裁判が行われる際に証人として召還される可能性があるとの説明を聞きました。私達が家に帰る頃合いにはもう大分夜も更けていましたが、とりあえずお腹もぺこぺこだったので、まずはいつも通りおじさんの部屋で夕飯を頂くことにしました。

夕飯の時おじさんにあの変質者という関係か聞き出してみました。何でも高校の頃の同級生だったという話はそれとなく分かりましたが、それ以上についてはお茶を濁されてしまいました。一体何だったのでしょうか。

代わりにおじさんが今日何をしていたのか聞いてみたところ、彼はただ一言カラオケとだけ答えました。なんと彼は今日一日中近所のカラオケで歌っていたと言っています。一人で9時間です。信じられません。それに私はカラオケという場所に行ったことがないので、できれば誘って欲しかったです。……自分からは絶対に頼みませんが。

そんな具合で今日私は目の前で人が逮捕されるといって、人生でも数えるほどのビックイベントを経験してしまいました。恐らくこの日記帳始まって以来の大事件でしょう。私もあの変質者のように、この日記帳を人に見られるなどというという失態を犯すまい、と強く心に誓いました。特にあの人にも見られてしまったらと考えると、想像しただけでも恥ずかしくて冷や汗が止まりません。

さて、時間も時間ですのでもうそろそろ布団に潜り込みたいと思います。おやすみなさい。

参考資料4 観察記録3

8月20日

僕は今、再びこのノートを書き綴ることが出来る喜びに打ち震えております。行動の自由こそ奪われてはいませんが、未だに我が表現の自由が奪われたわけではありません。筆記用具と大卒ノート程度の日用品であれば、勉強の為と称して看守に頼みすぐに支給して頂くことができました。勤勉な人間は例えどの

ような社会においても、細やかながら優遇されるということがよく分かります。僕はまた人間を観察することが許されたのです。このノートとペンと観察対象さえあれば、僕は何処であろうと誰であろうと観察することが可能でしょう。ただし適切な観察対象が見つかるまでの間、いつもの人間観察ではなく只のつまらない近状報告日記となってしまうことが痛恨の極みではあります。

惜しむらくはあの男の観察作業を中断されたされたことでしょうか。あの時部屋にノートを置き忘れるような失態さえ犯さなければ、私が激情に身を任せて行動しなければ……いや、やめておきましょう。もはや過ぎたことを悔いても意味は御座いません。これから観察対象としての評価に耐えうる人間を、この留置所の中でゆつくりと探していけばよいだけの話です。

ふいに僕を呼ぶ声が鉄格子の向こうから聞こえて参りました。面会要求とのことです。天涯孤独の僕に面会を求めるような人間がこの世に……一人だけ心当たりがありました。僕はすぐに身支度を整え、外界の人間様と接触するための準備を致します。

「おじさんは何で行きの電車座っていかなかったんですか？席もガラガラだったのに」

「いや、ちょっと……電車やバスの座席には座らないとポリシーで決めているのでね」

「……?」

年の離れた男女の会話が遠くから聞こえて参ります。彼はあの少女を連れて来ておりました。二人きりで会話することが出来なかったのは少し心残りですが、何にせよ彼女も経緯を知りたいと思うのは当然の欲求でしょう。これは仕方ありません。「よつ。よく見るとお前随分やつれたな、ちゃんと食つてるのか?」

入室するなり話を切り出したのは彼からです。

「ええ、長年張り込むような生活が続いていましたのでね。ここ数年はずっとこんな体型です」

「何年続けた?」

「今年で五年目ですね」

「風呂には入つてたのか?」

「部長の家のユニットバス、お湯が早く出るので見つかる心配もなく美に快適でしたよ。感謝しています」

彼には苦虫を噛み潰したような顔をされてしまいました。まあ家主不在の時間帯に無断で風呂を借りられていたと聞いて、あまりいい思いのする人間は僅かでしょう。

「で、君が今喋りながら必死で書き込んでいるものは何だ?」

「嫌だなあ部長、よく知ってるはずじゃないですか。観察記録ですよ。この場合は自分の経験に基づく内容ですから、ただの日記帳なんですけどね」

「その奇特な趣味がたたつてこんなところまで来たというのに、まだ続ける気かね」

「そりゃあもう。それこそ死ぬ寸前まで綿密に書き溜めて、墓

場まで全部持ち込む予定ですから」

「呆れ返つて物も言えんよ……」

部長が目頭に手を当てて困惑している間、付きそいの少女が口を開きました。

「あの一……色々聞きたいことがあるんで質問しても宜しいでしょうか?」

「あん?」

「ひつ……」

「おいおい睨むな睨むな。彼女怖がつているじゃないか。それに君はそこまで威張れる立場でもないだろう」

「ふんっ」

「うう……。おじさん、私この人嫌いです」

「ほれ見ろ。で、質問は」

「ええっと、とりあえずお二人はどういう関係なんですか?」

「高校の頃と同級生ですよ。我々は新聞部に所属しています、僕が副部長で彼が部長でした」

「あの頃は毎日楽しかったな。私が文化祭実行委員の粉飾決算を糾弾したり、こいつが教頭に張り付けて愛人関係を突き止めた」

「お二人ともなかなかクレイジーな学生生活を送られていますね」

「とにかくこいつの人間観察能力は天才的だったが、あまりにも度が過ぎていたんだ。性格上取材すると決めた人間はそれこそ家に張り付けてまでとことん取材するもんだから、おかげで

退学寸前まで追い詰められた奴も少なくない」

「寸前ですつてば。僕は観察して得られた結果から考察するのが趣味なだけであつて、それを人に見せてどうこうするつもりはありませんね。それを言えば部長の規則に対する執着も相当なものでしたよ」

「そうか？」

「部長はあまりにもきつちりとしすぎた性格だから、規則に反した人間を徹底的に晒しあげてしまふんですよ彼は。いくら学生新聞だからつて、実名まで出すことは……」

「いや、実名報道が時に強い効力を発揮することもあつてだな。」

つまりは……」

「は、はあ……まあ、お二人とも仲がよかつたんですね」

彼女は当り障りのない無難な感想を述べておりました。

「そんなこんなで卒業式。私達は別の大学に進学した。去り際こいつは何て言ったと思ふ？」

「いつか貴方の人間観察をする時が来るかもしれませんが、その折はよろしくお願いします、でしたかね」

「あの時は私の身も心も震え上がつたよ」

「でも有言実行だつたでしょう？」

「有言実行だからつて何事もいいとは限らんよ」

「そうですか……」

「それより私が聞きたいのは君の卒業後だ。大手マスコミ系企業に入社したんじゃないのかね」

「あんなもの一ヶ月で辞めてやりましたよ」

「それはまた何故だ」

「とある事件の重要参考人を嗅ぎまわつて、必死の思いでそいつが犯人であるつていう特ダネを掴んだんです。で、デスクにどうやつて掴んだんだと聞かれて、変に勘ぐられても嫌だから正直に重要参考人のベッドの下に三日三晩潜り込んでおりました、つて素直に答えましてね」

「お前就職先を東ス〇か何かと勘違いしたんじゃないのか？」

「そしたら即荷物をまとめて無期限停職しろとのご通達ですから。事実上のクビですよ。まあ一応形式上は一身上の都合による自主退職ということにしておきましたがね。まったく、近頃のマスコミからは、記者魂の気概をこれっぽっちも感じとることができないもんですね」

「そこは警察に突き出されなくて感謝するところだろうが、ばかたれ」

「というより、こんな話堂々と看守さんの前で喋つてもいいんですか……？」

「で、仕事を辞めた後はしばらく実家ではーつとしていたんですが、そのうちにまた人間観察でも始めるかという件になりました。道端で見かけた人の元にふらつと付いて行き、適当に屋根裏に潜んでその人物を観察する。ところがどうもこいつがつまらない。どうやら高校時代には自分の人間観察を記事にすることができたようなのです。しかし今の僕は只のしがいない二ト、目的意識を持たない私にとって、人間を観察して楽し

むような余裕は皆無だったのです」

「おじさん、何かこの二ト偉そうですよ」

「まあ黙って聞いてやれ」

「ああ、もはや僕は人間観察から楽しみを見出すことが出来ないのだろうか！ 陰鬱な気持ちに苛まれたその時、僕は偶然街中で部長のことを見かけたんです」

「私を？」

「ええ、部長を見かけた瞬間ビーンと来ましたね。ああ、この人は相変わらず規則的な生活を繰り返しているんだなって。しばらく部長のことを追跡していたら住居、勤め先、行きつけの美容院までばっちり突き止めることができました。そしてこれから部長の規則的な生活を僕が観察するんだと考えると、その興奮で、身体の震えが止まらなくなつて、しまいました」

「うわ、なんだこいつ」

「気持ち悪いですね」

「とにかく部長の生活は一点の曇りも無く完璧でしたよ。まず毎日朝6時に就寝し、夜23時に起床する習性に関しては一 fra 一秒たりとも遅れていませんでした。それから毎週月曜日の冷凍商品半額の日に近所のスーパーで冷凍エビシユウマイを3パック購入し、毎月第一週の日曜10時に駅前の美容院で散髪し、毎年2月20日に市役所で確定申告をする。これは地味ながら凄いことなんですよ。一日、一週間、一ヶ月、一年、どの尺度で切り取ったとしても、驚くべきことに部長の行動は常に周期的なんです。これだけ正確に自分のスケジュールを調整で

きる人間なんて、部長以外に見たことがありませんよ。部長の生活は……何と言いますか、全てが大小複雑に絡み合った歯車で構成されているのです」

「よく知ってるな、全部正解だ」

「うわあ……」

「ここ5年間あの部屋は僕と部長、二人だけの空間が築かれていました。部長が生活し、私がそれを綿密に観察する。それだけで充分だったのです。それだけで私の知的好奇心は十分に満たされたのでございます。それなのに……その女は！」

「へっ？」

「その女は私達二人の間に土足で踏み込んできやがったのです！」

「あ、はあ、そうですか。ごめんさい」

「貴女という外的要因が加わった結果、部長の生活は激変しました。貴女存在は彼の生活に毎日毎日細やかなズレを生じさせているんですよ。彼だつてそれを迷惑に感じているはずですよ！ んん？ キミはそのところを理解しているんですかあ！？」

「そ、そんなこと言われましてもねえ……あれ？」

「何ですか」

「ひよつとして、あなた……私じゃなくて、おじさんのことをストーリー書いていたんですか？」

「当たり前です。僕は君になんて一ミリたりとも興味を抱いたことはない」

「え、だつてあなたプールまで追いかけてきて……」

「それは自意識過剰というやつですよ。最初から私の興味は部長にしかない」

「うぐぐ……」

確かに彼女は8月6日に市民プールへ出かけたようですが、僕はずっと部屋にいたので知りようがありません。これに関しては私自身がそう言っているんだから事実です。

「……」つ言わせてもらつてもいいか？」

部長が口を開きました。

「何です、部長」

「君はひよつとしたら私の行動が綿密に計画された後、実行していると思ひ込んでいたようだが、それは間違っている」

「何だつて？」

「私は全ての行動を無意識の内にこなしているだけで、君が思ひ抱いているような正確無比な人間というわけではない。だから日課の行動が時間通りこなせなかつたからと言つて血の涙を流しながら悔しがることは何もないし、彼女の存在が邪魔だなどと思つたことは一度もない。そもそも私から彼女を招き入れたことぐらい、君もよく知つているはずだろう？」

「なっ」

「おじさん……」

「むしろ私は彼女に感謝しているぐらいだ。私は彼女から多くのことを学んだし、人との会話がこれだけ楽しいと感じたのも久方ぶりだ。彼女を煩わしく思ひ込んでるのは、残念ながら

君だけだよ」

僕はあつけに取られておりました。彼はあれだけ綿密な計画を思いつきで行動できるのでしょうか。到底信じられませんが。そしてあれだけ美しく、何年もかけて築きあげた規則的行動を、この男はこうも簡単に崩し去ることができるのでしょうか。

「そんな……信じられない……こんなことつて……」

「信じるも信じないも本人がそう言つてるんだ。信用してもらいたいね」

「おじさん……！ いつもより3割増しかつこいいです！」

「ぐつ……ふ、ふふふ。まあいいでしょう。自然にとつていた行動がいつの間にか規則的になつていた、それをたまたま僕が観察していた、ただそれだけの話ですからね。しかしここで忠告しておきますよ。部長の行動規則はもはや芸術的な領域まで達しています。僕が五年間観察記録をつけた結果から言うと、貴方は人間という生物の観点から見ても特異だということをよく覚えておいてください……」

「……そ、そうか？ 私はそんなに変なのか？」

「おじさん、気にしちゃ駄目ですよ」

「それではもうあなた方と話すことも御座いませんね。服役が終わつたらまた会いましょう……」

「何言つているんだあいつは」

「いいですよ、早く帰りましょうおじさん」

「あーつと、そうだお嬢ちゃん」

「何ですかもっ」

この事は言うべきでしょうか。別に言う必要もないですが。考えている間勝手に口の方から開いていました。

「……お幸せにな」

「は？」

私は彼女に対して抱いていた理不尽な怒りの正体を、やっと理解することができました。お恥ずかしながら私は、十も年の離れたこの少女に嫉妬していたことに気がついたので。

「ほら、早く帰るぞ」

「あ、はい」

こうして僕の彼に対する観察記録は、僕の彼に対する初恋と同時に終わりを迎えました。

参考資料5 記録なし

「で、おじさんは監視されていることに気づいていたんですか？」

「まあ何となくではあるがな。確信までは持てなかった」

「引っ越したりはしなかったんですか」

「どうせ引っ越し先もすぐバレる」

「でしようね……。おじさん、ひとつ思いついたことがあります」

「何だ」

「ひょっとしたらあの人、おじさんのことを好いていたのかもしれないですね」

「え」

「だっていくら観察の為とは言え、五年間も一つ屋根の下でおじさんと同居していたんですよ。おじさんに対して特別な感情を抱いていない限り、こんな特殊な性癖満たせる訳ありませんって。あ、ひょっとしたらあの人高校時代からずっとおじさんの事を……」

「そうか？ しかし私は男で彼も男だぞ」

「性別の差なんて関係ありませんよ！」

「はあ」

「最初は変な人だと思ってましたが、5年後しのラブストーリーだと解釈すれば悪い気はしませんね！」

「何だね君は急に」

「失礼、柄にも無く少し興奮してしまいました、ふひっ」

「そ、そうか……」

「……」

「何だこの間の伸びようは」

「仕方ないですよおじさん、会話の行間に語り手がないんですから」

「確かにな。例えば今こうやって夕飯を食べながら君と会話しているとか、今日のおかずはナス味噌の炒めものとか、そういう情報までいちいち口に出さなければならぬのは不便だな」

「あの人も居たら居たで困りますけど、居ないと居ないでなかなか不便ですねえ」

「困ったものだ。またストーカーが家に住み着いてもらわねば」「冗談でもやめてくださいよ、もう懲り懲りですって」

「あ、そういえば。もう一つ気になることがあります」「どうした」

「結局プールに居た不審者ってのは誰だったんでしょね。あの人も私には興味がないって言ってましたし」

「たまたまプールにいた変質者じゃないのか。案外そういった盗撮写真が高値で取引されているのかもしれない」

「いやはやそんな、私の水着姿なんて二束三文の値打ちもつきませんってばあ」

「何故そこで照れる。ほら、馬鹿なこと言っていないで、もう夜遅いんだから早く帰りなさい」

「はい」

「不審者に気をつけたまえよ」

「すぐ隣だから大丈夫ですって。それじゃおやすみなさい、おじさん」

「ああ、おやすみなさい」

彼女が部屋に戻ったのを確認し、私は押入れから黒いレインコートを取り出した。二度とこれを彼女に見せることは出来ないうら。結構値の張るブランド物だったが仕方ない。私は断ち切りバサミでそれを細かく切り刻み、中身が見えない色つきのビニール袋に入れてきつく縛った。

それから私は押入れに敷き詰められたDVDの中から一枚だけ取り出す。「0806極秘」とだけ書かれたそのディスクは、私が犯した過ちの全てを物語っていた。中身をパソコンで開くと、カメラを構える女性の水着姿が大量に表示される。それはこの部屋の隣に住むある少女のものだ。彼女は私のような下衆い人間に盗撮されているとも知らず、歳相応に可愛らしい無邪気な笑顔をカメラに向けていた。

あの日。部屋に潜む彼が監視していないのを確認し、隙を見て私は家を抜け出した。行き先については彼女が前日に話していたのでよく知っている。さらに万が一見つかったとしても言い逃れができるよう、念のため彼の普段着によく似た黒いレインコートを羽織って外出した。有り体に言えば私はこれから自分が犯すであろう罪に恐れをなして、卑しくも他人に擦り付けることで安心感を得ようとしていたのだ。

あの日。何故私はあるような犯罪行為に手を染めたのだろうか。何故私は彼女の水着姿を遠くからレンズ越しに眺め、狂ったようにシャッターを連打してしまったのだろうか。こんなに時間を忘れるほど夢中になった経験は、長い人生でも生まれて始めてだった。そう、それこそ間抜けにも、自分が撮影されていることすら気づかないほどにだ。

私が彼女に対して抱いている感情は口に出すことも憚りたくなるほどに下卑たものであり、それは当然しも離れた少女に抱くべきでないことは重々承知している。私にだってそれなりの社会的地位があり、そろそろ私の親の老後のことも考えなくて

はならない。だが彼女を一目見た時から芽生えたこの異常な欲望は、黒々と煮凝ったタールの如く私の行動原理をずぶずぶと侵食しているのだ。

当然この円盤を叩き割って燃えないゴミの日に分別すれば、私の突発的欲情体験は闇の中に葬り去られる。だがそれでも、例え円盤の表面をカッターで切り刻もうとも、如何なる手段でデータをフォーマットしたとしても、このDVDが存在していたという事実は否定することはできないのだ。お恥ずかしながら現に今も、私は彼女にこんな形で性的興奮を覚えているほどに浅ましいのだ。まさに今愚息は直立し、今もなお滾っているのである。

私はふと元同居人の習慣を思い浮かべた。勝手に私の家に5年間も居座り、犯罪であることも承知していながら身も心も捧げた彼の間観察という行為だ。あの時私は彼の下賤な悪習を嘲笑しておきながら、心の何処かで憧れを抱いていたのかもしれない。自己の存在を誰にも気づかれないこと無く、あの少女のことを一心不乱に一日中観察できる自分の姿はきつと幸せなのかもしれない。自らの罪を認めこれからそれを償う彼と比較して私は、一体何処に謙遜する部分があるというのだろうか。私が檻に繋がれない理由が、一体何処にあるというのだろうか。

部屋ではただ一人、私だけが悶絶していた。私は突発的にトレイから円盤を取り出し、その両端に力いっぱい曲げモーメントを加えたが、少しばかりしなるだけで大破にまで至らせることは出来なかった。いや、本当は私にこれを破壊する気なん

で微塵も無かったのかもしれない。結局の所私は臆病者なのだ。自分の犯罪記録を生き恥だと理解していながら、その喪失を惜しむ半端者なのだ。彼のように人間観察を美学と認め、己の特殊な性癖を受け入れることもできないような卑怯者なのだ。あたかもストーカーの被害にあったかのような素振りを見せる偽善者なのだ。私は犯罪者なのだ。変質者なのだ。本来罰されるべき罪を背負った人間なのだ。

私は自己に対する罪悪感のあまり咆哮しそうになったが間一髪でそれを堪え、気持ち切り替えようとベランダの窓を全開にした。夜陰を吹き抜ける風は昼間のじめじめとした温みを含んでいたものの、皮膚の表面を拭うことで私に若干の精神的余裕を与えてくれる。私は部屋の電気を消し、サンダルを履いてベランダに出た。今夜は星がいつもより輝いて見える。深い闇夜の中で光と名のつくものは、月光と数える程度の街灯しか見当たらないからだろうか。ふと隣の部屋からは明かりが漏れていないことに気づいた。彼女はもう眠ってしまったようだ。もし彼女がこの右手にあるDVDのことを知ったら、一体どんな反応をするのだろうか。私を軽蔑するのだろうか。あるいは私を嘲笑するのだろうか。家の前で倒れていた彼女を発見してから今日までの思い出は、汚れた一夏の記憶として認識されてしまっただろうか。

そして次の瞬間、突発的に私はfrisbee形状の物体を暗闇へと投げ入れていた。しまった、と焦った時には時既に遅し。円盤は不安定な空中姿勢から徐々に持ち直し、くるくると水平

に回転しながらその姿を漆黒の中へと消してしまふ。しばらくしてからカシャリ、という音が地面から響いてきた。

すぐ私にはやってしまったという後悔が浮かんだ反面、すうと己の心持が軽くなったことに気がついた。ポイ捨てという環境清掃に反した行為を犯しておきながら、今までの鬱憤が嘘のように消えてしまったのだ。傍から見れば馬鹿馬鹿しい一時的な逃避行動に過ぎないだろうが、今となつてはこれよかったとさえ思えるほどの開放感に満ちあふれていた。

何にせよこの暗闇の中、何処に落ちたかも分からないたった一枚のディスクを探しだすなどという無益な行動は、雲を掴むような作業であることが目に見えている。仕方ないがDVDは明日の朝起きて探すということで私は妥協することにした。ベランダの鍵を閉めようとしたその時、下から怒りを含んだ叫び声が聞こえてくる。

「もーっ、誰ですか！ こんな時間にDVDなんか投げ捨てたのは！」

その女性の声にはどうやら聞き覚えがある、と気づくまでに時間はかからなかった。

佳作『観察記録』